姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第36集

畑田遺跡

－第26次発掘調査報告書－

2016

姫路市教育委員会

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と体制

姫路市飯田三丁目50番１において、平成27年（2015年）に社会福祉法人　姫路尚歯会によるグループホームの建設計画（対象面積約528.85㎡）が持ち上がった。当該地区は周知の埋蔵文化財包蔵地である畑田遺跡（県遺跡番号020432）に該当する（図１）。事業者より文化財保護法第93条に基づく届け出が提出されたことから、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。そこで、まずは事業地内の遺跡の状況を把握するために確認調査（第25次調査、遺跡調査番号20150029）を行った（図２・３）。調査の結果、８箇所設定した調査区のうち、すべての調査区で地山を検出し、うち５箇所で土坑や溝などの遺構を確認した。

計画地に遺跡が存在することが判明したため、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づいて、工事の掘削により遺跡が破壊される建物基礎や地中梁部分を本発掘調査の対象とした。調査に際しては、姫路市と事業者で委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが実際の調査や整理作業等を実施した。

この間の体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

教　育　長	中杉　隆夫	
教 育 次 長	八木　　優	
生涯学習部長	植原　正則	
文 化 財 課 長	花幡　和宏	
係　　長	大谷　輝彦	（調整）
技 術 主 任	南　　憲和	（調整）

姫路市埋蔵文化財センター

館　　長	秋枝　　芳	
係　　長	岡﨑　政俊	（庶務）
主　　事	小林　啓佑	（庶務）
係　　長	森　　恒裕	（調整）
技 術 主 任	福井　　優	（調査）

1. 畑田遺跡　2. 黒表遺跡　3. 小山遺跡　4. 手柄山南丘遺跡　5. 古屋敷遺跡
6. 浜田遺跡　7. 生矢神社裏遺跡　8. 竹の前遺跡　9. 三宅遺跡　10. 丁田遺跡
11. 湯田遺跡　12. 長越遺跡　13. 邨東遺跡　14. 西久保遺跡　15. 東久保遺跡
16. 大町遺跡　17. 大塚遺跡　18. 中地天神遺跡　19. 権現遺跡　20. 中ノ町遺跡
21. 大石橋遺跡　22. 石ヶ坪遺跡　23. 善慶田遺跡　24. 飯田カスカエ遺跡
25. カスカエ遺跡　26. 真福寺遺跡　27. 構遺跡　28. 東川遺跡　29. 笹山田遺跡
30. 大鳥遺跡　31. 南雲遺跡　32. 坂川遺跡

図１ 畑田遺跡の周辺の遺跡（S=1/20,000）

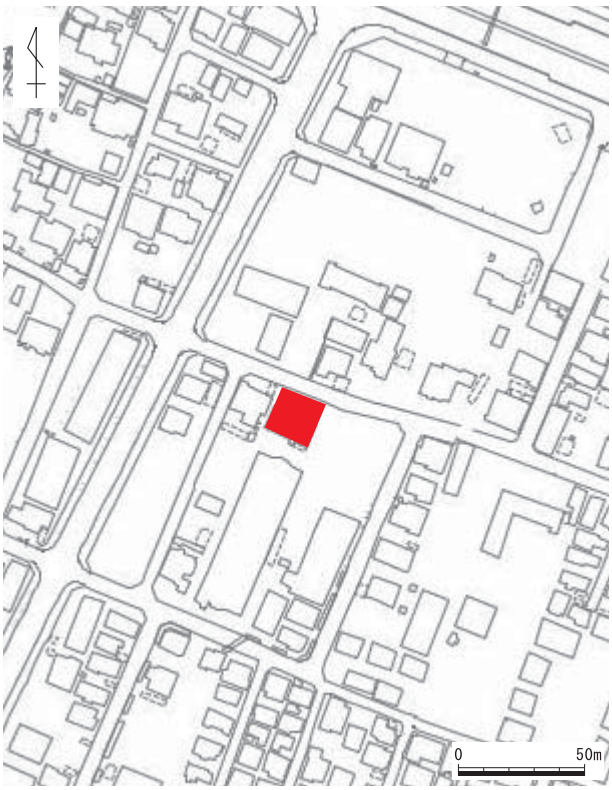


図２ 調査地の位置（S=1/3,000）

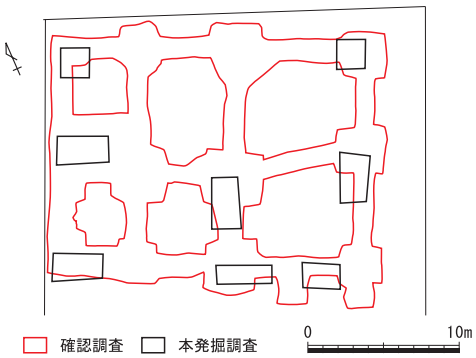


図３ 確認調査・本発掘調査位置図（S=1/500）

第２節　本発掘調査（第26次調査）

調査面積は180.82㎡である。本発掘調査は、平成27年（2015年）６月２日から開始した。耕作土と床土（土壌化層）および遺物包含層と考えられる土層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。検出した遺構の調査を進めながら完了した調査区から記録写真撮影・図面作成の後に、順次埋め戻していくという工程を繰り返した。同年６月17日に現地調査を完了した。現地調査終了後は姫路市埋蔵文化財センターで出土品等の整理作業を行い、本報告書刊行をもって一連の調査を終了した。

第２章　調査の成果

第１節　調査概要

調査地は、既設建物を撤去した更地の状態で、標高は約5.6mである。図４は、調査区北東隅の柱状図である。層名は、造成土を１層、旧耕作土を１層、土壌化の著しい粘土層を３層、地山であるシルト層および砂礫層を４層とする。地山の検出レベルは、当該調査区内では4.8～4.9mでほぼ一定している。ただ、調査区北東側では砂礫層が露出し、北西側ではシルト層であっても砂礫層由来の円礫を多く含んでいることから、砂礫層との層界である可能性が高い。また、調査区南東隅では部分的に、現地表下約1.5mまで調査がおよんだものの地山であるシルト層が分厚く堆積しており、砂礫層には至らなかった。これらを勘案すると、旧地形は調査地南から北側へと緩やかに高くなっていたと考えられる。

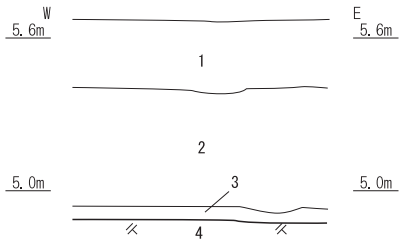


図４ 調査区基本土層図（S=1/30）

今回検出した遺構は弥生時代の土坑（SK1～4）と溝（SD1～3）、古墳時代の土坑（SK5）、鎌倉時代の土坑（SK6）である。全体的に遺物の出土量が少ないために詳細な時期については判然としないなか、SK1・2は弥生時代前期、SD3は弥生時代後期に、SK5は古墳時代後期のものであることが判った。。このほかの溝２条（SD4・5）とピット20基（SP1～20）の帰属時期については判然としない。

そのなかで、最も豊富な遺物が出土したSD3についてみていくことにする。

第２節　SD3

SD3は調査区の南西端で検出した。既設建物等による後世の削平を受けており残存状態は非常に悪い。幅は50cmから2.6mと一定しない。深さは約30cmを測る（図７）。断面形は二段掘り状を呈している。溝幅が一定しない原因は、二段掘り状の上部が削平を受けていることによると思われる。本溝は、わずかに湾曲しながら北西－南東方向に走行している。底面のレベルはほぼ一定しているために、流れの方向はわからない。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたような状態ではなく、一定期間開放された状態にあったと考えられる。

本溝からは比較的多くの弥生土器が出土した（写真図版）。その出土状況から土器は、溝全体というよりは部分的にまとまって出土したという印象を受けた。

出土した土器は、広口壺（1・2）、長頸壺（3）、甕（5～9）、高杯（10～12）、装飾高杯（13）、器台（14）である（図８）。

１の頸部は太く短く、上方に広がる。風化が著しいため器壁は粗く、調整等は不明である。２はやや長い頸部から外反する口縁部を有する。頸部は縦方向のハケメで仕上げ、頸肩部には突帯を廻らしている。胎土は在地産と思われるが、器形は西方の岡山県南部周辺に系譜を求めることができそうである。３はほぼ垂直に立ち上がる頸部をもち、頸肩部界は比較的明瞭である。その肩部に２条の線刻がみえる。残存部分が少ないためにモチーフは不明である。頸部内面に施されたピッチの短い横方向のハケメには、２種類の異なる原体を使用している可能性がある。４はやや上げ底状を呈する底部である。胴部下半と同様に底面にも微細なミガキが残る。

５・６はやや肩が張る甕である。外面のハケメについて、５は縦方向であるのに対し、６は横から右上がり方向に施している。５は最終的に左上がりのピッチの短いミガキで仕上げている。５・６ともに内面のケズリは肩部までおよぶ。７は右上がり方向にタタキが残る甕で、肩部付近にはそのタタキを切るやや強いヨコナデがみえる。内面は、胴部下半には縦方向のケズリを、上半には斜め方向のハケメを施す。不安定な器形を呈する。胎土には混和材と思われる赤褐色粒を少量含む。８は口縁部をやや強く折り曲げる、あまりみないタイプの甕の口縁部である。胎土に含まれる鉱物粒や器形から、在地の土器としてはやや違和感を覚える。９の口縁部は上方に拡張し、ほぼ垂直に立ち上がる。その端面には３条の擬凹線文を施す。内面は肩部まで時計回りのケズリが及んでいる。胎土には石英粒や長石粒、褐色粒に加えて、石英や長石に角閃石等が噛み合った状態の小礫を含むなど、当該地域ではあまりみられない特徴を有する。また、器形は岡山県南部周辺の土器編年の指標である上東式に特徴的な甕と考えられることから、西方からの影響を考えて大過はなさそうである。10・11の有稜高杯は後期以降に特徴的な型式である。その稜線部分について、10は放射状のミガキによって形成しているのに対し、11は沈線

を引くことで形成している。杯部の立ち上がりは両者ともに強く外反している。脚部内面には両者ともしぼり目が残っており、ケズリはみられない。また、断面の観察により、10・11はともに、脚部から杯部にかけて連続的に成形を行うのではなく、両者の成形の間に一定の乾燥工程をおいていることがわかった。ただ、杯底部について、10は円盤様の粘土を充填しているようにみえ、11は完成した脚頂部が杯底部となっているように、若干の違いが看取できる。12の杯部外面の稜線は10・11に比べて甘くみえるが、依然として放射状のミガキを施すことによって稜を造り出そうとする指向性は見て取れる。

13は装飾高杯の杯部である。施文等の装飾は少なく、口縁端面に擬凹線文を施すのみである。胎土は水簸したかのような比較的精良なものである。器壁に化粧土を施している可能性がある。

14は器台の口縁部で、その端面には３条の擬凹線文の上に右上がりの沈線で充填する鋸歯文を施している。施文には金属製と思われる鋭利な工具が使用されている。

以上みてきたように、SD13から出土した遺物を周辺の調査成果と比較すると、赤穂市東有年・沖田遺跡の土坑40（中田編2003）や同市周世入相遺跡の土壙22（甲斐編1990）の一部と同様の傾向を示すと考えられる。今回対象としたSD3出土資料は遺構の性格上、厳密な意味での同時期性は担保されていないものの、今挙げた遺跡の時期から類推すると、弥生時代後期中葉に位置し、溝はそれに近い時期に埋没したと考えられる。

第３章　まとめ

今回の調査では弥生時代を中心とした遺構を確認することができ、遺物が比較的豊富に出土したSD3は、弥生時代後期中葉に埋没したことがわかった。

最後に、そのSD3の性格について予察を行ってみたい。本調査地と南接する16次調査の北端には、SD8・9という弥生時代後期の大型円形周溝墓が存在している（小柴2003、大谷2010）。両者の墳丘は既に削平を受けているために詳細は不明であるが、SD8は幅約2.5m、深さ20cm とSD3の法量と近い。ただ、SD8がこれまでの見解通りに円形周溝墓であるとすると、SD3の方向とは整合しない。しかし、中播磨では、姫路市八幡遺跡（阿久津編1974）や太子町川島遺跡（櫃本編1971）のように、円形周溝墓と方形周溝墓が併存する例が知られている。両者が共存する調査例は依然少なく、同時期性などの問題を内包してはいる。しかし、中播磨の周溝墓にみられる墳形の違いは、必ずも排他的なものではなく、方形の墳丘が卓越する西播磨と、円形の墳丘が卓越する東播磨に挟まれた緩衝地帯とでもいう状況を示していると考えられている。現状ではSD8・9の出土遺物の精査など、なおも検討の余地は残るものの、上述した当該地域周辺の周溝墓の様相を勘案すると、今回調査したSD3は16次のSD8と一連の不整形な方形周溝墓を構成し、円形周溝墓と方形周溝墓が共存する例となり得る可能性があることを指摘しておきたい。

【引用・参考文献】阿久津久編1974『播磨八幡遺跡』兵庫県文化財調査報告第９冊兵庫県教育委員会、荒木幸治編2009『弥生墓からみた播磨』第９回播磨考古学研究集会の記録　第９回播磨考古学研究集会実行委員会、大谷輝彦2010「Y15）船場川東遺跡群」姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第七巻下資料編考古　姫路市、大手前大学史学研究所編2007『弥生土器集成と編年－播磨編－』六一書房、甲斐昭光編1990『周世入相遺跡－県道高雄－有年横尾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県文化財調査報告第70冊　兵庫県教育委員会、岸本道昭2011「3　播磨の弥生社会と古墳の成立」香芝市二上山博物館編『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨』学生社、小柴治子2003「3. 船場川東区整遺跡　第６地点15区（第16次）」中川猛編『TSUBOHORI　平成13年度（2001）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会、第９回播磨考古学研究集会実行委員会編集発行『弥生墓からみた播磨』第９回播磨考古学研究集会　資料集、中田宗伯編2003『東有年・沖田遺跡－ほ場整備事業に伴う発掘調査－』赤穂市文化財調査報告56　赤穂市教育委員会、櫃本誠一編1971『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会

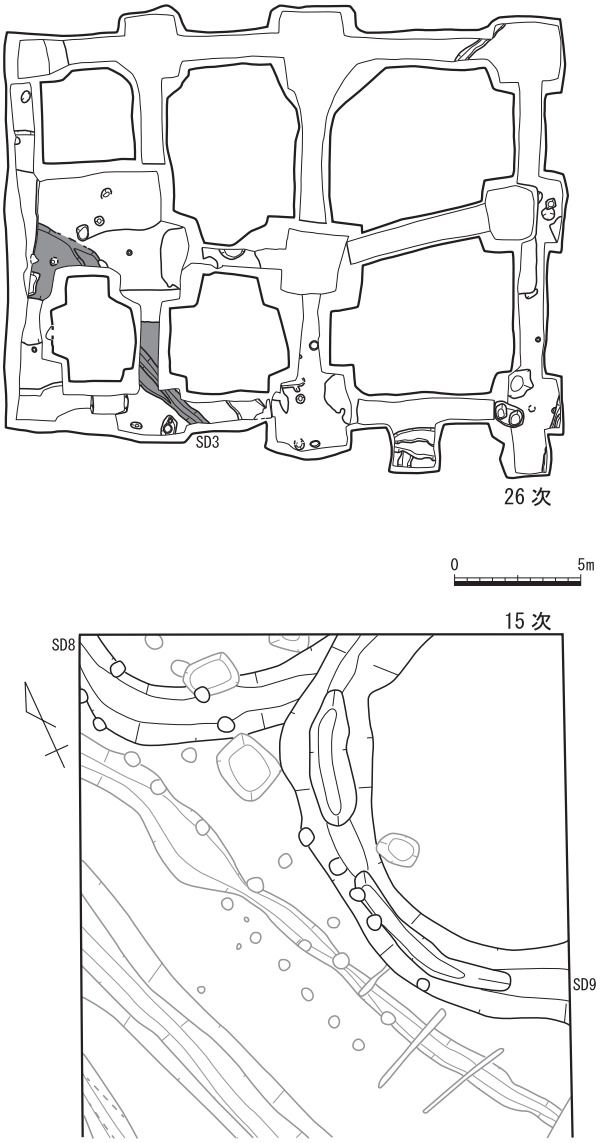


図5 26次SD3と15次SD8・9 平面図（S=1/300）

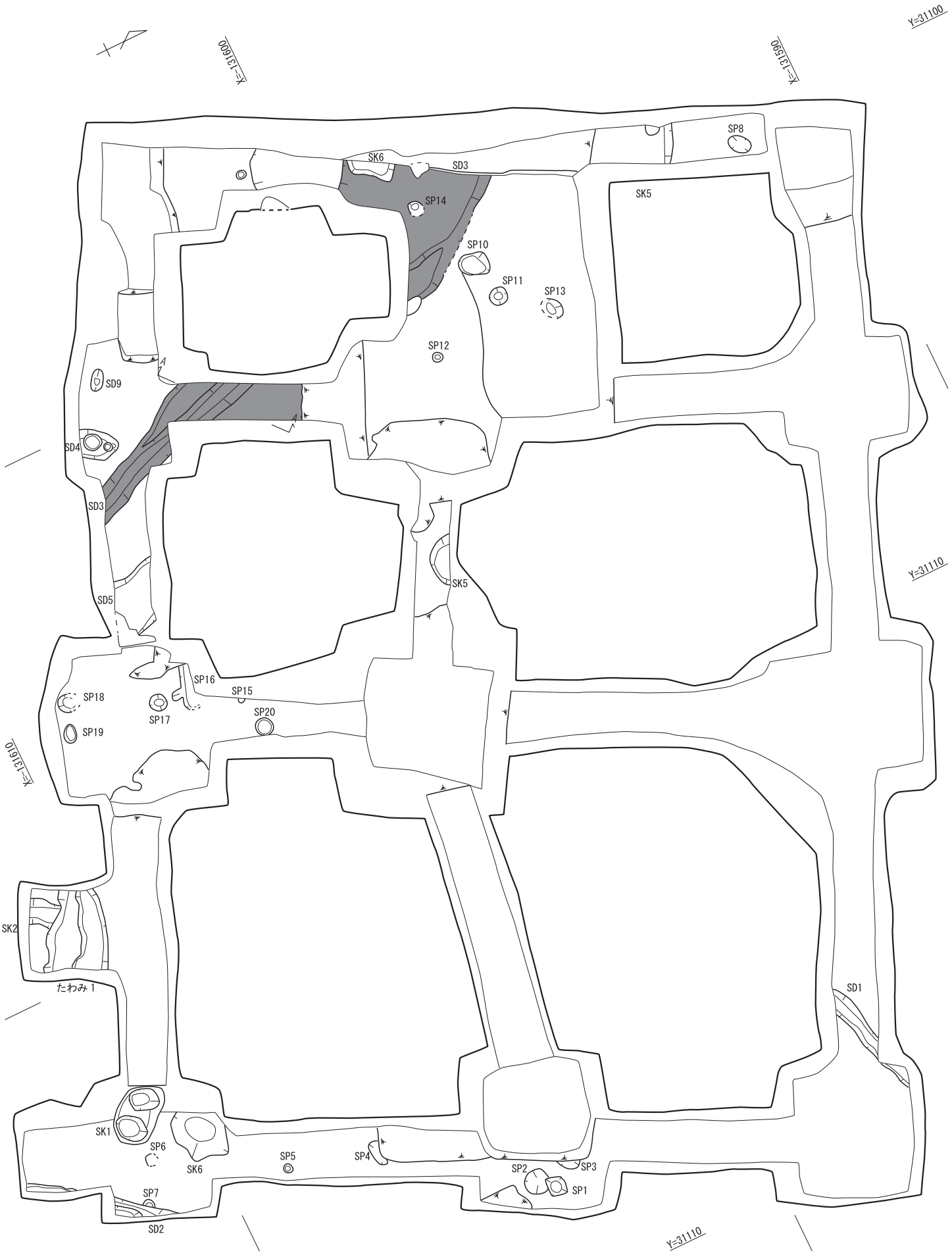
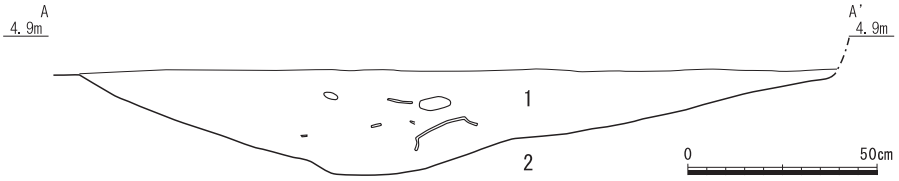


図6 調査区全体図（S=1/100）



1. オリーブ黒色（5Y2/2）シルト…しまりやや強い、比較的均質、弥生時代後期の土器片を多く含む。
2. にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト…しまりやや強い、均質【地山】。

図 7 SD3 断面図（S=1/20）

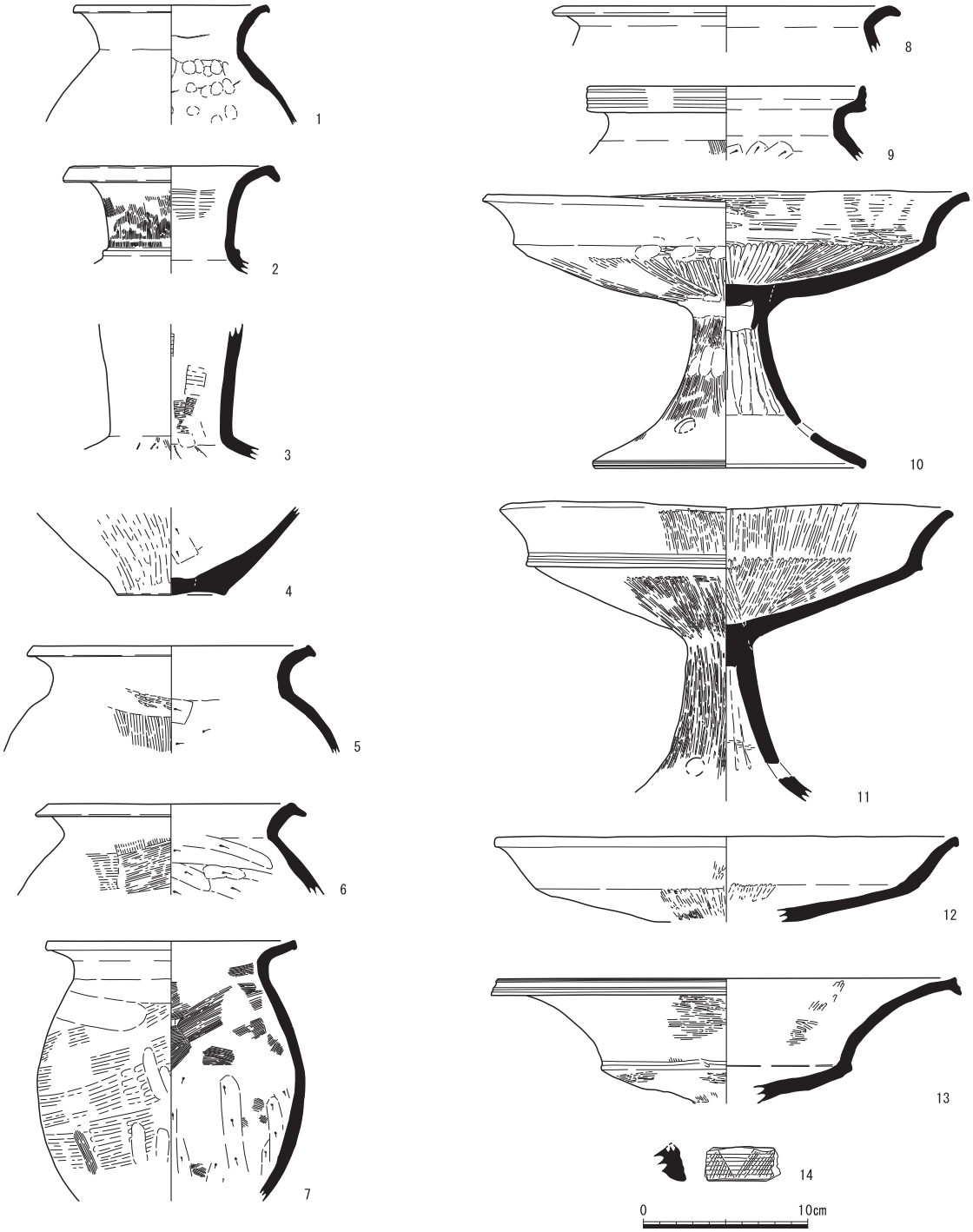
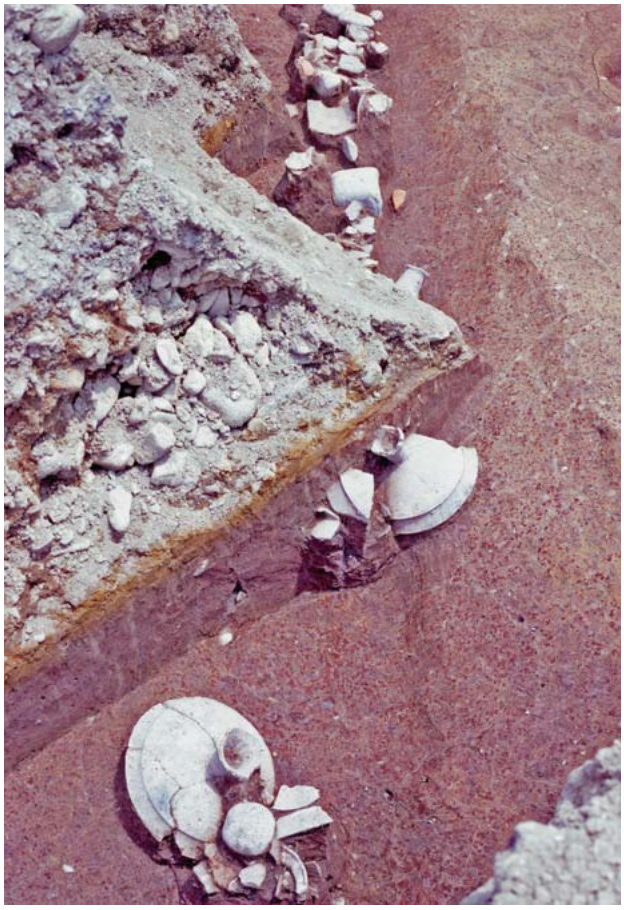


図 8 SD3 出土土器（S=1/4）

1.SD3 全景（南西から）

3.SD3 土層断面

4. 弥生土器 甕（7）



2.SD3 土器出土状況（北西から）

5. 弥生土器 甕（9）

6. 弥生土器 高杯（10）

例言

1．本書は、姫路市飯田に所在する畑田遺跡（県遺跡番号020432）第26次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、姫路市飯田三丁目50番１におけるグループホーム建築工事に伴い、社会福祉法人姫路尚歯会と委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター　福井　優が担当した。
3．発掘調査と報告書作成の費用は、社会福祉法人姫路尚歯会の負担による。
4．発掘調査は、平成27年６月２日から同年６月17日にかけて実施した。調査面積は、108.82㎡である。
5．本書の編集・執筆および遺構・遺物の写真撮影は福井が行った。
6．本報告にかかわる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
7．発掘調査・報告書作成に際して、下記の方々にご援助を頂きました。記して感謝申し上げます（敬称略）。
社会福祉法人　姫路尚歯会
黒岩　紀子、香山　玲子、清水　聖子、田中　章子、玉越　綾子、寺本　祐子、野村　知子、藤村　由紀、三輪　悠代

凡例

1．発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第Ⅴ系を基準とし、数値はm単位で表示している。
2．本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図（姫路南部）および姫路市基本地形図を使用した。
4．遺構の略称は、以下のように呼称している。SK：土坑、SP：柱穴・小穴、SD：溝
5．遺構・土層等の呼称は、整理際して変更したものもある。
6．土色と土器の色調は、小山　正忠・竹原　秀雄編2003『新版　標準土色帳25版』日本色研事業株式会社に準拠した。
7．土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載している。その際、文様などについては、残存部位のみの図化にとどめている。
8．遺物番号は基本的に通し番号とする。
9．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。

報告書抄録

ふりがな	はたけだいせき
書名	畑田遺跡
副書名	第26次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第36集
編著者名	福井　優
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番1　TEL(079)252－3950
発行年月日	平成28年（2016年）３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はたけだいせき 畑田遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 いいだ 飯田三丁目 50番１	28201	020432	34度 48分 59秒	134度 40分 14秒	2015.6.2 ～ 2015.6.17	108.82 ㎡	建物 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
畑田遺跡	集落跡	弥生時代	土坑 ピット 溝	弥生土器、須恵器	20150210

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第36集

畑田遺跡－第26次発掘調査報告書－

平成28年（2016年）３月31日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター　〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252－3950
発　　行　姫路市教育委員会　〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目１番地
印刷・製本　丸山印刷株式会社　〒676-8566　兵庫県高砂市神爪１丁目11番33号